井上光晴新作品集

3

勁草書房

井上光晴新作品集　3

昭和45年6月20日　第1刷発行
昭和51年10月15日　第3刷発行

著者　井上光晴

発行者　井村寿二

発行所　株式会社　勁草書房

東京都文京区後楽 2—23—15
電話 (03) 814—6861
振替東京 5—175253

*落丁・乱丁本はお取替えします
*定価は外函に表示してあります

図書印刷・和田製本
Printed in Japan, 1970.

0393—882020—1836

目次

階級 3
赤い手毬 92
赤毛の犬 109
熱いレール 128
似た男 169
眼の皮膚 181
キャンデー 198
ローラースケート 209
このまんじゅしゃげ 253
鱶ねむる志々伎島 261
西海の役者たち 294
蜘蛛たち 313
解題 358
井上光晴論 渡辺広士 360

井上光晴新作品集

3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

階級

ああ、狂い咲きするまんじゅしゃげ
十円銅貨が音たてて
くるくるまわって川床に
い、い、い、い、突込んだ
（閉山節）

1

どうしてそいつがそんなにたくさんの鼠を飼うとるのかわからん、と行商人はいった。それも白鼠とかほかの変った種類の鼠とかいうのならとにかく、ただのどぶ鼠だからね。人に売るためでもないし、食用にしてくうわけでもない。漢方薬売りは薄茶の半袖シャツを着ており、鬘でもかぶったように、生え際の目立つ、妙に黒っぽい頭をしていた。三百匹ばかりもおったろうか。トタン板と寄せ集めの金網で作った小屋の中にかたまって、じゅうっというような焼き鳥みたいな声を上げとる。それに生きたままの犬を放り込むんだからね。どうなると思う。鼠は逃げ惑うと思うか。それどころか、四方八方から襲いかかるんだ。あっという間もない。何というとったかな、アフリカかどこかの川で、水牛なんかに襲いかかる魚がおったろう。ちょうどあれ。ああいうふうに襲いかかって、投げ込まれた犬はぎゃあぎゃあ啼きながら暴れ廻っとるうち、内臓を食い破られてぐたっと動かなくなる。そうするともうお終いだ。忽ち白骨になるまでしゃぶりつくされてしまうんだから。

一九六六年の夏、佐世保から平戸口に向う急行バスの車中で、後方の席に坐った行商人がその話をはじめた時、まばらな乗客はにやにや笑いながら耳を傾けていた。退屈しのぎにちょうどよかったし、冗談と思えないほど漢方薬売りのまじめくさった口調が、やがてどんでん返しされるであろう話のおちに、充分の期待を抱かせたからである。有家直道は男より二列前の席できいていた。昨日の午後、東京を発って佐世保駅に着くまで、二十時間余りの間、彼は殆ど眠っていなかったが、どんよりとして熱っぽい頭の裡に、妙に粘っこい行商人の声は、おしつけるように入ってきた。

「まあ、自分の眼で確かめんことには本当にできんだろうが、何かこう煮え立った油の中に放り込んだ肉片みたいに、じゅっという音を立てたと思うたら、あっという間に生きとる赤犬が白骨になってしもうたとだからねえ。それも小犬というわけじゃない。ちゃんと犬殺しの捕って行くような野良犬。わたしが見たのは犬だったが、猫でも変らんと

そこの家の者はいうとった。ぎゃっという悲鳴が二、三度きこえたと思うたら、眼玉まで食われてしもうとる。……」行商人は言葉を重ねた。

「鼠が猫を食うんか。できたね、こりゃ」

風呂敷包みを膝においている男がいうと、皆が笑った。

「まあ、わたしの話を信じられんというのなら仕方ないがね」行商人はなおもいった。「世の中には信じられんことが起こりよる。今度、北松の一帯を廻ってみて、つくづくそう思うたよ。あれだけ栄えた炭鉱がみんな全滅してしもうたとだから、そりゃひとつやふたつ奇天烈なことも起こるだろうが、生きた犬を餌にしとる鼠なんて、これまでできいたこともないからねえ」

「ほんとに話の上手な人ね」有家直道の前席に坐っている女が呟くようにいい、横の男が半ばからかう表情をみせて振り向いた。

「そりゃ何処ね、一体。あんたが見た、そのたくさん鼠を飼うとる場所というのは」

「慈眼炭鉱」行商人は即座に答えた。「つぶれとるから炭鉱とはいえんかもしらんけどね」

「慈眼炭鉱の何処。おれはあの辺のことよう知っとるが」

「三股寄りの方。炭鉱のあった時分は小張というとったかな。少し行った所に何とかという精神病院ができとるよ」

「小張ね」男はいったが次の言葉につまった。

「慈眼か何か知らんが、鼠が猫を食うようになっちゃおしまいだな」できたね、こりゃといった男が、どういうわけか不機嫌な声をだした。

「猫じゃない。犬だよ」

「しかし、さっきあんたは猫でも変わらんと、そういうたろう」

「猫でも変わらんとはそこの家の者がいったんだ。わたしじゃない。わたしが見たのは犬だからね。それでもあんなふうにいっぺんにやられる犬を見ると、猫でも変わらんといわれたら、そうかねと思うようになるよ」

「冗談もほどほどにしとかんと、元に戻せんようになる」バスの中央に坐っているワイシャツにネクタイをした男が中腰になって、裁決をつけるような口調でいった。「猫とか犬とか、話としちゃおもしろいが、そんなふうにいい張られると、きいとる方も人間だから、いわずにいいことまでいってしまう。話にはやっぱり引上げ時がかんじんだからね」

「だから現場を見なければわからんと、わたしはいうとるんだ」

「現場。あんたの舌の先の現場かね。何百匹か知らんが、わけもないのにどぶ鼠を飼うとるという話が土台眉唾だと思うとったら、こともあろうに今度は生きた犬まで食べさせるとだから。それも大概分のところで止めとけば、まだ笑ってすませるのに、慈眼の小張なんてはっきりいうもんだから、笑い話ではすまされんごとなってしまう。そうで

しょう。みんな」

「わたしは最初からありのまま、見たままの話をしとるだけですよ」漢方薬売りは負けていなかった。「だからこそ、それは何処だときかれれば、慈眼炭鉱の小張区だと、ちゃんと場所まで教えた。それがどうして眉唾だといわれるんですか」

「慈眼炭鉱なんて、今は誰も住んどらんよ。そりゃあんたのいう野良犬位は住んどるかもしれんけどね。あたしあ、二年ばかり前、あそこをトラックで通ったことがあるが、炭住の跡には草ばかり生い茂っとって、人間なんかひとりも会わなかった」

「二年前は知らんが、今は住んどるんだ。嘘だと思うなら行ってみなさい」行商人はいい返した。「それもひとりや二人じゃない。精神病院のまわりにはちょいとしたマルタン（炭鉱離職者）の部落ができとるよ」

「ああ、ああ、もう」

有家直道の前席に坐っている女はわざとらしく声を上げて背のびをしたが、二人とも止めなかった。

「一体あんたは何用があって、つぶれた炭鉱なんかに行った。それとも、慈眼炭鉱にくれば生き犬を食う鼠の見世物が見られるというポスターでも、何処かに張ってあったのかね」

「わたしは商売しとるんだから、人の住んどるところなら何処にでも入って行きますよ。……」

行商人と乗客のやりとりをきいているうち、そのままの姿勢でいるのに耐えられぬような気怠さが有家直道を襲った。しかし目を閉じても、瞼の底は覚醒剤入りの絵具でも塗ったように黄色く乾いている。そして黄色い絵具をじいっと見つめていると、次第にひとつの顔に形作られていく。

二ヵ月程前、満石常雄と名乗る青年が、東京、荻窪に住む彼の下宿を訪ねてきた時、有家直道は咄嗟に自分と何らかのつながりがあることを感じた。自分より二つか三つ年少だと思われる青年の顔は少し面長ではあったが、彼によく似ていた。満石常雄はまるで挨拶代りのように、先月、母の英子が博多で病死したことを告げ、死ぬ間際まで直道兄さんの名を呼びつづけたので、それを知らせにきたのです、といいながら目を伏せたのだった。

「それで君は……」

「ええ、弟です。兄さんのことはずっと以前から母にきいていましたが、会って迷惑がかかってはいけないと思っていたんです。母もそういっていましたし、当時は僕の方の父もいたものですから……」満石常雄はいった。初めから口にした直道兄さんという言葉の馴馴れしさを延長し定着させるかのように。

「迷惑だなんて……。それで母は何の病気で死んだのですか」

「……心臓です。心臓がわるくて……」やや間をおいて満石常雄はいった。

それから彼を兄さんと呼ぶ青年は、母と自分のこれまでの生活に関するいろんなことをたてつづけに喋った。

「さっき、僕の方の父といいましたが、実をいえば僕にとっても二人目の父になるんです。本当の父は僕が生まれるとすぐ船に乗るといって出たっきり、行方不明になったそうです。

かあさんはずっと苦労のし通しでした。二度目の父はほかに女を作って、金も入れなかったので、かあさんがずっと洋裁などをして働いていました。かあさんはいつも口ぐせのようにいっていたんですよ。こういうくらしをしなければならんのも、みんな直道さんを捨ててきた罰が当ったんだ。それにはいろんな深い事情があったのだけれども、直道さんは何にも知らない赤ん坊だったのだから、どんなにそれが難しいことだったとしても、かあさんはやっぱり直道さんを有家の家に残してきてはいけなかったのだ、ともいっていました。

もう大分前のことですが、唐人町のそば屋で働いている若い人にかあさんは名前をきいたことがあるんです。ふっと直道兄さんのような気がしたからだといっていました。直道兄さんとは赤ん坊の時に別れているので顔を見覚えているはずもないが、いつも直道兄さんのことを考えていたので、そんな気持になったのでしょう。そば屋の若い人は唐津からきたと答えたそうです。

そういうかあさんの気持を知っていたので、僕はいつも直道兄さんに会いたいと考えていたんです。でもさっきもいったように、かあさんに固く止められていましたから、できなかったんですよ。かあさんが亡くなる時、直道兄さんの名を呼びつづけるので、僕は枕元で約束したんです。どんなことをしても、きっと直道兄さんを探しだしてかあさんの気持を伝えるよというと、じいっと僕を見ていましたが、目にいっぱい涙をためてうなずいてくれたんですよ。

僕は今、漫画を勉強しています。中学の頃から漫画が好きで、少年雑誌に何度か入選したこともあります。家がそんなふうな事情だったので高校には行けなかったけれども、漫画には絶対自信があるんです。横浜に親切な運送会社の社長さんがいて、僕はそこの事務所の二階に寄宿しながら勉強していたんですが、今度会社がよその会社に合併されて、そこにいつまでもおれなくなったんですよ。……」

前ぶれもなくあらわれた異父弟のべたつくような口調にひきずられて、結局、部屋を移転するのに必要な金（一万円）を貸したのだが、自分に全くよく似た男が去った後、有家直道は母とはついに生きているうちに会えなかったのだという感傷のなかで、いいようのない嫌悪感にさいなまれていた。

一ヵ月ばかり経った頃、満石常雄はふたたびやってきた。三輪車を運転中軽い事故を起こしてしまった。弁償金七万円のうち二万円程立替えてくれないかという申し出だったが、有家直道はそんな余分の金を持っていないと断わった。

すると急に、三千円でもあれば助かるのだがと金額を大幅に変更し、彼はむかつくような気持で二千円渡した。そしてさらに二週間程後、品川運送店を経営しているという男の来訪を受けたのである。運送店主の言葉によると、住込んだばかりの満石常雄が引越料を着服して逃げたというのだ。大した金額ではないが、保証人もおかず蒲団まで算段して住込ませた人の親切を足蹴にした性根を許し難いので、兄であるあなたに承知しておいてもらいたいといういい分であった。

「あの人と僕は何も関係ないのですよ」

「しかし、あんた方は兄弟でしょう。そうじゃないんですか」運送店主は部屋の中をじろじろと見廻しながらいった。

「それは、兄弟といえばそうかもしれません。母親が一緒ですからね。でも僕は生まれるとすぐ、その母親と別れているんです。会ったこともありません。あの人が訪ねてくるまで、ああいう兄弟がいたことさえ知らなかったんですから」

「むこうじゃはっきり、あんたを兄だといってましたよ。こっちだって、いくら手不足だからといって、ただの風来坊を住込ませたりはしませんよ。大した金額じゃないといったって、引越に行けば、直接現金を扱う商売だからね。大学に通っている実の兄がいるというから、その言葉を保証人代りにして信用したんだからね。そうでなければ、こうやってあんたを訪ねてきたりはしませんよ」

「どうしろというんですか。それで……」

「どうしろとはいいませんよ。正式の保証人ならともかく、兄弟だというだけだからね。ただ、こっちも大きい商売をやってるわけじゃないから、引越料位といって、みすみす泣き寝入りするわけにもいかないんだよ。……」

「警察にでも何処にでも訴えて下さい。関係のないことにタッチするのは嫌なんですよ、僕は。……」

有家直道は瞼を開いた。目を閉じると眠れないのに、光線が瞳孔に入ると、頭がくらくらしてとても辛抱できない気分だった。犬を食う鼠の話はどのようにケリがついたのか、或はつかなかったのか。車内には白々しい空気が流れ、誰もが気まずい顔をしていた。

「どこか加減でもわるいのかね」

「あ、いいえ」彼は隣席の男に答えた。「昨日の晩、汽車であまり眠れなかったもんですから」

「休暇か何かで帰ってこられたのかね」

「そうです。夏休みです。学生ですから」

「ああ学生」

男がそれっきりものをいわなくなったので、彼は首をまげて走って行く窓の外を見た。テレビのアンテナがあるので、人間が住んでいるのだと思える細長い家が道下の川岸にへばりつくような恰好で建っている。何に使用するのか、空地の溝には古ぼけたコンクリート枠が幾段かに積上げられており、それを過ぎると、つぶれたデパートの広告板を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

壁に貼りつけた農家が四軒ほど点在する。虎屋という名前をつけたそのデパートは、朝鮮戦争時の景気をあて込んで佐世保の目抜通りに開業されたのだが、二年も経たぬうちに、以前からの玉屋デパートに打ち負かされたのだった。

「鼠がまだ野良犬でも食っとる間はいいが、金網でも破ってでてきてみろ。眉唾だとか馬鹿話とか、笑うとってはすまされんごとなるからね。……」

声は行商人のものだった。有家直道は黒い川床に遊ぶ裸の子供たちを見ていたが、「まだあんなことをいいよる」という反撥は、漢方薬売りがまだいい終らぬうちにきこえた。

「鼠が金網を破ったらどうなる。犬や猫じゃ飽き足らずに、人間にでも襲いかかるというのかね」

風呂敷包みを膝においた男が合槌を打つように笑ったが、その声はかすれた。

「そういうことになろうね」行商人はいった。「あんた達がわたしの話を信用せんからいうが、慈眼炭鉱にはちゃんと鼠を飼うとる者がおるんだ。あの辺の部落を全部廻ったわけじゃないから、もしかすると、鼠を飼うとる者はほかにもおるかもしれん。眉唾だと思う者はそう思うとればいい。今に事件が起きてから、ああやっぱりあの人のいうたことは本当だったと思うても遅かろうと、そういうとるんだ。……こりゃ、今そういわれてみて考えたんだが、生きた野良犬を白骨にする位だから、人間の赤子ぐらいひとたまりもなかろうね」

「へっ、だんだん話が太うなったな」

有家直道は窓から目を離して、ネクタイをした男がはっきり後向きになるのを見た。

「野良犬から今度は人間の赤子か。怪獣がはやっとるんで、あんたの頭は少しどうかなっとるんじゃないか。猫を食う鼠なんて、ちょいとした怪獣もんだよ」

「ラドンじゃなくて、チュウドンか」風呂敷包みを膝においた男は皆が笑ったのでさらに図に乗った。「なんだか焼酎飲んで酔っぱらっとるみたいだな。チュウドンというのは。……」

「賭けてもいいよ」皆の笑いが消えると、行商人は乾いた声をだした。「そうたくさんも持っとらんが、有り金全部を賭けてもいい。途中下車して、今日これから慈眼に行ってもいいんだ。誰でもいい、賭けるというなら、今からでも鼠のおる場所に連れて行くよ」

「できないことをいっても駄目だ」ワイシャツにネクタイをつけた男は陽に焼けた顔を前に突きだした。「一緒に行こうといったって、誰も行けないことは承知しているくせに。有り金全部を賭けようとか、香具師みたいなことはいわない方がいいよ。効能書をしゃべるのはかまわんが、いくらあんたの口が動くからといって、猫を食う鼠の話を信じこませるわけにはいかんだろう」

こうまでいっても信用できんのなら仕方がない、という

ふうに行商人は頭を振った。そしてこの件については決して後には退かないという口調で呟いた。

「慈眼炭鉱の跡に住んどる者が、どんなことをしてくらしとるか。あんた達は知らんから、鼠の話をしても顔色ひとつ変えないんだ。……今にわかるよ、わたしの喋ったことの意味がどんなふうなものか。マルタンのことを知らずに普通のくらしをしとるものは、生きた犬を食う鼠の恐ろしさはわからんだろう」

「作り話なら、どんな恐ろしいことでもいえるさ」ネクタイをした男は執拗にいい返した。「潜竜がつぶれる前、毒入り卵を売っとる女がおるという噂が流れとったが、現場をおさえた者は誰もいなかった。ダイナマイトがいっぺんにごそっと盗まれて、松浦線のトンネルに仕掛けられたという話もでとった。しかし汽車がいっぺんでも爆発したかね」

「あの話は切谷だったかな。ダイナマイトが盗まれたのは鬼池のことだと思うとったが」

有家直道の前に坐っている男が修正した。

「だから、わたしは噂と現実とは違うと、そういうとるんですよ。噂なら何とでもいえる。誰かが誰かを殺そうとして毎日つけ狙っとる。根も葉もない事件でもまことしやかにさえいえば、いっぺんにぱっと拡がってしまうんだ。どんなにでっち上げた事件だって、バスの中でこれこれのことをきいたといえば、証拠も何もないし、そうじゃなかろうという者は誰もおらんわけだからね」

有家直道は充血した眼をふたたび窓外に移した。道路は道下の川岸を離れて、大きく左方に迂回する。やがて視野のひろがる前方に、三年前迄、彼の父が経営していた波並廃鉱が見えるのだが、かなり角度のついた勾配をもう十分程も走らねば、バスはその地点にでないはずだった。

2

暗い幕のなかで、北井精神科の裏庭は白くぼんやりと濁ったように見える。おざなりのみすぼらしい花壇には、幾本かの日まわりが黒くうなだれているが、茎という茎が虫に食われていて、陽がのぼっても決して頭をあげようとしないのだ。おれはコメと一緒に鉄条網の下をくぐり抜けるための溝を掘っていたが、炊事場の方角で、二言三言人の話し声がした。

「誰かきたぞ」

「黙って掘れ。むこうがきてからでは間に合わんぞ」おれはコメの耳に口をあてていう。

「気違いが時間通りにくるかね」

「気違いだからくるんだ」おれはいう。「約束したことは守る。普通の人間よりあいつらは固いよ」

「そうかね。……」

「しいっ」おれは制する。「きた。いや、あれは違う……」

「見張りがいるんじゃないか」

「見張りなんかおるもんか。あれはほかの患者だ」
「ほかの患者が騒いだらどうする」
「騒がんよ。誰だって、ここからでたいんだからね」
「金持っとるかな」
「持ってくるさ。昨日念を押しといた。心配ならここで確かめればいい」
「この位掘れば大体もぐってこれるぞ」
おれはじいっと耳をすます。近づいてくる足音はまだきこえぬが、かすかに扉でも叩くような音が響く。個室に監禁されている誰かが吠えているのだ。
「ほんとにくるかな。昨日の晩はどうしてこなかったかというて、気違い相手じゃ文句もつけられんからね」
「くるにきまっとるさ。気違いだからよけいに昂ぶっとるよ」
コメは黙り込む。気違いのねえさんでも気違いの男に抱かせるのは嫌か。おれは咽喉までかかった言葉をおさえて、少しコメを慰める。
「気違いというてもピンからきりまでおるからね。今夜くる奴は、自分でもむりやり病院に押し込まれたと思うとる位だから、普通の者と変らんよ。ここにくる前は切谷で売店やっとった男だから」
「切谷におったんか」
「売店のほかに食堂もやっとったらしい。ちょいとしたもんよ。今でも時々、妹というのが面会にきよるからね」
「もう時間やないか」
おれは黒い空を見てうなずく。あいつがやってこないはずはないのだ。鴻舞玄一郎という殿様みたいな名前をもっているあいつは、毎晩鉄条網の側でおれの差入れる闇焼酎を受取るたびに、これもいいが後がたまらんごとになる、というと、瓶の腹を叩きながら、中指と薬指を突込んだ口を鄙猥にばくばく動かしていた。
「くるかね」
「くるさ。もしそういう女がおるのなら連れてきてくれ。鉄条網ごしで何にもできなくても、あそこを開いて見せてさえくれれば、五百円だすというたのはあいつだからな」
おれは強い口調でいう。
「その方がよかったかもしれんぞ」
「何が」
「ここに連れてきて五百円取った方がさ」
「馬鹿いえ。五百円を二人で分けたらいくらになる」
「二人で分けるんか」
「お前のねえさんを入れて三人なら、なおのこと少なくなるじゃないか。第一、あいつが見たままで承知するはずがない。……それにおれは別に考えがあるんだ」おれはいう。
「別の考え」コメはいう。「何を考えとる」
「今掘っとる溝をあいつだけに使わせるのはもったいないからね。それに鴻舞ひとりが相手じゃ、いくら売店やっとったというても、金はそう続かんやろう」おれはいう。

「明日になればみつかるよ。ここに溝を掘っとることは……」

「みつからんようにしとくんだ。今夜、あいつが戻る時、板切れを渡してその上に土をかぶせておけばいい。手間はかからんよ。花壇の陰だし、よっぽど気をつけてみなけりゃ、みつかるもんか」

冷んやりとする風にむかって、おれは顔を上げる。するとあいつが鉄条網のすぐ間近に立っているのだ。ハンドスコップを握った手を止めて、コメも気づく。

「待っとったよ」おれは弾む息を抑えていう。

「ほんとにでられるのか。外にでられるようにするというので僕はきたんだからな。今日は外にでられないが、明日ならうまく行くといっても、僕はもうそんな手には乗らんよ」

鴻舞玄一郎はべらべらとした声をだす。

「でられるよ、今、ちゃんとだしてやる」おれはいう。

「さあ、ここを抜けてこい。しゃがんで、頭の方から先に持ってくるんだ」コメはいう。

鴻舞玄一郎は意外に要領よく、腹匍うような動作で鉄条網の下に掘った溝をくぐり抜けた。おれとコメは男の両手を持って引きずり上げ、ズボンについた泥をはたいてやった。おれは内心、こいつのシャツやズボンについた泥の跡形が問題だなと思ったが、今更それをどうこうしようと考えても仕方がない。ボタ屑の敷きつめられた坂道を、おれは先に立って三十米ほども下り、白い闇夜とでもいえるようなざらざらした大気の前方に、ぼんやりとかたまった明りの見える地点で立ち止った。

「あんた、約束した分の金は持ってきたろうな」

「金ならちゃんとポケットに入れとる。しかし今、それをだすわけにはいかんねえ」鴻舞玄一郎は片方の手を顳顬にあてていう。「僕はこれまで人からずっとだまされつづけてきたからね。金をだせといわれて、はいそうですかというふうにはいかんよ。あんた達を信用しとらんわけじゃないが、とにかく金を渡してしまえば、それまで白と考えとったことが、みんな赤になるような世の中だから、滅多なことではいそうですかというふうにはいかない。僕が自分で売店と食堂やっとった時も、この流儀だったから、今もそうさせてもらうよ」

コメが舌打ちしたが、おれは何もいわず明りの見える方向にむかって歩きだした。すると何を考えたか、鴻舞玄一郎は爆発するような口調で、北井精神科に対して罵詈雑言をあびせはじめた。

「ねえ、折角こうやって脱出できたからには真実のことをきいてもらうよ。病院がなぜこんなボタばかりの土地に建てられたのか。僕は知っとる。坪千二百円。今時、こんな安い土地が何処にあろうかね。しかも北井院長は慈眼炭鉱がまだ閉山を決定してもおらんうちに、ここの土地を手に入れとるんだ。こりゃ陰謀。陰謀でなければ詐欺。そうは

思わんかね。慈眼がまだつぶれてもおらんのに、一方では三坑跡の闇取引が成立しとる。これはどういうことかといえば、慈眼炭鉱の経営者はつぶれる前につぶすことを決定していたということだ」

「おもしろうないね」コメは吐き捨てるような声でいう。「炭鉱はみんな、誰だってつぶれる前につぶすことを決定しとるさ。それに、ボタの上にゃ、ほかの建物は建たんからね」

「やめろ」おれは小声でいう。「つぶれたヤマの話しても仕様ないよ」

「そう、つぶれたヤマの話をしても仕様がない」ちぐはぐな足どりで歩きながら鴻舞玄一郎は応ずる。「慈眼、眉浦、冷川、多聞岳、切谷、久須、鬼池……みんなつぶれて跡形も失くなってしもうた。なかでもひどかったのは波並。血を見ん時はないという日が三ヵ月もつづいて、あげくの果てに、安全燈室から火がでた。そのどさくさまぎれに社長は殺されてしまいよった」

「あんたは何も知らんごたるね」コメはいう。「火がでたのは安全燈室じゃなくて、事務所からでたんだ。社長が殺されたというが、あん時……」

「やめんか。この人といい争うて何になる」おれはいう。

「そう、そう」鴻舞玄一郎は満足そうな声をだす。「次から次につぶれて行く炭鉱を、僕はじいっと見とったんだからね。切谷の売店で、残り少なくなったキャラコの布地を売りながら、僕は考えとったんだ。切谷もいまにつぶれるやろう。ほかのヤマがつぶれて、切谷だけ生き残るというふうにはとてもいくまい。そうしたらどうするか。僕はまず手初めに食堂のリヤカーを売った。うちの大盛カレーは切谷の名物みたいになっとったが、わけのわからん噂ばかり飛んで、まだ閉山とも何とも決まっとらんうちに、おじさん、いよいよこのライスカレーともお別れねという者もあったよ。……」

「よう喋るな」

おれはコメの肘をつつく。喋りたいだけ喋らせとけばいいのだ。

「切谷の大盛カレーか。さぞうまかったろうな」コメは小馬鹿にしたような声でいう。

道はそこから二つに割れる。以前このあたりはボタ山のガスが吹き流れて、鼻をつまんでいなくては通れない程だったが、慈眼炭鉱が閉山すると、ガスもばったり止まった。半年程前、結核で死んだ朝鮮人の李山承久が、どうもわからんといったことがある。ボタ山の内側が燃えてガスはでよるんだからねえ。閉山したからといってボタ山に水かけたわけでもないのに、どうしてガスまでよらんようになるのか。まだ掘る炭は残っとるのにつぶしてしもうたというて、怒りよったのかもしれん。

「ボタ山が怒りよったのなら、ガスをもっと吹きだすはずじゃないか」おれはいう。

「そりゃそうだな。そういうことにならんと嘘だな」李山承久はしきりに首を振る。

おれが生まれてはじめて人の顔を覚えた時、李山承久はもうそこにいた。小学校に上がったばかりの頃、二坑の納屋（炭住）から火がでて、六棟の長屋全部をなめつくしたことがあったが、共同浴場の裏手から燃えさかる炎を見下ろしながら、小学五年生の李山承久はうれしそうな口調でおれにいいきかせた。火事を見る時は、時々目をつぶって、おれがつけ火したんじゃない。おれじゃないよ、と心の中で呟いとった方がいいんだ。そうしないと、自分がつけてもおらんのにだんだんつけ火したような気持になる。火事はそういうふうに心を昂ぶらせるもんだから、ああと思ったら目をつぶらねばいかんぞ。

「ちょっと待ってくれ」鴻舞玄一郎ははあはあいいながら声をかける。「そんなに早く歩かれると、とても追いついて行けんよ」

「あたり前のことをいうとる」コメはいう。きこえてもかまわぬと思っているふうだ。

「早う女に会いとうはないのか」奴が並ぶのを待っておれはいう。

「ほんとに女がおるんだな」

「嘘だと思うならここから引返してもいいぞ」おれはいう。

鴻舞玄一郎は頭を強く振る。コメはいったんおれの方をちらと見てから、奴に悪態をついた。

「そんながたびしした足腰で、よう女を抱こうと思うな」

「金は持っとるんだよ。嘘はいわない」鴻舞玄一郎はいう。

「ふん、それで金でもなかったら、どうなるかね」

破けた地下足袋の爪先で、コメが石を蹴ると、何秒か経ってがちっという音がした。おれの話に乗りながら、コメはなんとなくむかっ腹を立てているのだ。

「退院したら……」

鴻舞玄一郎がぶつぶつというのをききとれずに、おれは「退院したらどうするって」ときき返した。すると奴は「本当のことをいうと僕はもうすぐ退院するつもりだ」といい直す。

「北井病院の院長は患者が減るのを恐れとるから、まともにいえば断わるにきまっとる。まともな診断さえ受ければ、僕なんかはもうとうに退院できとるはず。賄場のおばさんが教えてくれたのでわかったんだが、病院じゃ僕のことをずっと前から、何でもない患者。どこも悪くない患者だとそういうとるんだよ」

「どこも悪くなかったら、さっさと退院したらいいじゃないか」コメはいう。

「北井病院がどんな所か知っとるやろう」鴻舞玄一郎は声をひそめる。「A・B・C・D・E。……患者は五段階にわけられている。DとEは牢屋で監禁。それでもDは一週間に一度入浴できるが、Eは垂れっぱなし。Bはプラス。Cはマイナス。プラスは病気のよくなる見込みのある者。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c